

第31回大阪大学野田村サテライトセミナー
野田村の地域力を語ろう
—東京の大学研究室から見た野田村の宝—

2015年9月11日、野田村生涯学習センターにて「第31回大阪大学野田村サテライトセミナー」を開催しました。今回のセミナーは、「がんばるのだから岩手県九戸郡野田村の地域力」(弘前大学出版会2015年3月)の出版を記念して、弘前大学と大阪大学が共催して開催しました。7月、9月、12月の3回シリーズの第2回目です。

講師には、首都大学東京大学院の市古太郎准教授、工学院大学の野澤康教授、八戸高専の河村信治教授を迎え、本の中から野田村の「漁業」と「ものづくり力」について、また、震災後、毎夏、学生ワークショップを行いに来村している東京のまちづくり研究室から見た野田村の地域力についてお話しいただきました。

第二部では、地元の漁師である小谷地勝さん、安藤正樹さんと、むらづくりNPOを立ち上げた下向理奈さんを迎えて、今後の村づくりについて語り合いました。

今回も、遠隔教育システムを使用して、大阪大学吹田キャンパスをつなぎ、同時中継でセミナーを行い、大阪大学の教職員や学生とも交流を深めることができました。

シャレットワークショップを通して考えてきたこと 野澤康先生

野澤先生からは、荷車という意味を持つ「シャレット」ワークショップの取り組みを通じて、「よそ者の視点」から村づくりを考えてきた経緯についてお話しいただきました。

野澤先生は、震災後から毎夏、東京から数名の学生と共に訪れて、短期集中型のワークショップを通じて野田村について考えられてきましたが、3年目を迎える頃には、東京の学生の感覚では通用しないことがわかってきたそうです。そこで村の「真の姿」を知り、将来像を描くために民泊体験、生業体験に重点をおくようになったそうです。

先生は建築、都市計画を専門とされていますので「空間的な提案」をされるのですが、その「空間的な提案」が持つ意味は、模型や絵など、具体的に見えるものを通じて、村づくりに対する「共通言語」、「相互理解」を図っていくことだとまとめられました。

今後、大学が4学期制に移行する中で、1学期分を野田村で過ごすような授業ができると良いのではないかと提案されました。

「野田村通い」から見てきた野田村のポテンシャル 市古太郎先生

市古先生からは、シャレットワークショップを通じて見てきた野田村のポテンシャルについてお話しいただきました。

市古先生は、他の被災地でも支援活動をされていますが、野田村は行政の対応だけでなく、地域の人たちが譲り合って対応しているので、同じ被害規模でも復興が早いと感じられているそうです。野田村には、いざとい時の対応力、地域力が高いと評価されました。

シャレットワークショップの目的は、行政計画などに対して「対案」をつくるのではなく、enrichーより豊かになる提案をすることだそうです。これまでに高台団地の共用施設の計画などを提案されたそうですが、より豊かになる、原案では触れ切れていないところを提案するように心がけられているそうです。これからの都市計画は、一度に決めて全てを実現するよりは、何度も提案を折り重ねながら計画していくことが大切であると述べられました。

また、野田村では観光化されていない生業体験は貴重な地域資源であり、復興においても生業と住宅・生活再建の関係が重要であると感じたそうです。生業と住宅再建の統合化のきっかけの一つに沿岸部の公園緑地に注目されており、鳥居から500mの位置にあり、歩いて行きやすい距離を活かしたまちづくりが必要だと述べられました。

野田村の「ものづくり力」と「漁業」 河村信治先生

河村先生はシャレットワークショップの回を重ねるごとに野田村の「生業」に注目するようになったそうです。

河村先生は、野田村には出稼ぎの元大工さんが多いことに気付いたそうです。出稼ぎ文集という物があり、大工さんは尊敬され、誇りをもって稼いで帰ってくるかっこいい存在であることがわかったそうです。高度なスキルを持った専門家集団として、元大工のみなさんは、野田村の力の一つであるとお話されました。震災後も復興住宅の建設を待たずに自力で自宅再建をした元大工さんがいたり、これまでの経験とスキルで祭りの山車をつくったりと野田村の力となっています。山車作りに工程表がなくても完成していくことに、河村先生は驚いたそうです。

また、野田村の漁師さんのオーラは紛れもなく野田村の宝だと言われました。村の子どもが漁師の仕事や生活を意外に知らない中で、「荒海団」の取り組みは、販促よりキャリア教育の効果が高いのではないかと話されました。



第二部 学生達との交流、そして、これからの村づくり

第二部では、漁師の小谷地勝さん、安藤正樹さん、下向理奈さんを迎えて、シャレットワークショップ、民泊等で訪れる学生達との交流を通じて得た、これからの村づくりに対する想いを語り合いました。

漁師の小谷地さんは、同じ齢くらいの子どもさんがいらっしやり、元気の源は子どもだという想いから、民泊の受け入れを始められたそうです。学生達とは、さまざまなアイデアを学生からもらい、意見交換できることが楽しいそうです。何度も再訪してくれる学生達は、仕事が辛い時の勇気づけになり、停滞しがちな組合での意見交換の場を中和してくれたり、よい存在だそうです。

最近では、地元の子ども達が漁業体験に来てくれるようになり、後継者にと期待されているようですが、漁師になりたいという子はまだないそうです。道具がなくても始められるような支援の仕組みも考えないといけないと思っておられるそうです。

民泊のコーディネート事業などを担う「NPO法人のんのりのだ物語」を立ち上げられた下向理奈さんからは、民泊事業を立ち上げた経緯、事業の効果についてお話いただきました。

下向さんは、震災の年にUターンで野田村に戻り、体験教育旅行のコーディネーターの募集に応募したことが、今の事業を始めるきっかけだったそうです。岩手復興応援隊の人から「野田村のことを教えて」と言われた時に、自分自身が野田村のことを知らないことに気づき、勉強を始められたそうです。

コーディネートをする中で、ボランティアで訪れる学生と触れ合う村民の方が、いい顔をしていることに気づき、村民が元気になる民泊事業を推進したいと思ったそうです。民泊により学生達が滞在型で活動するようになり、村民のまちづくりに対するイメージが変わり、心と心の交流が目に見えて感じられるようになっているそうです。

漁師の安藤正樹さんは、今話題の「荒海団」の可能性と課題について話されました。荒海ホタテはテレビなどでも取り上げられ、有名になってきてはいますが、まだまだPRが必要だと感じられているそうです。荒海ホタテは、まだまだ可能性がある素材なので今の活動を途絶えさせないためには、後継者が必要だといわれます。

ある漁業組合では、若い人が就労しやすいよう、一般的な仕事のように通常は17時まで、土日は休みといった勤務スタイルの漁業を展開されているところもあるそうです。安藤さんは、後継者の課題を解決するには、漁業に対する強い憧れややりがいが必要だといわれました。



意見交換では、生業体験、民泊はインタビュー調査では得られない、何気ない会話から学びがあると確認されたほか、民泊事業などを通じて、野田村を愛してくれる人を生み出す体験が必要であることなどが確認されました。